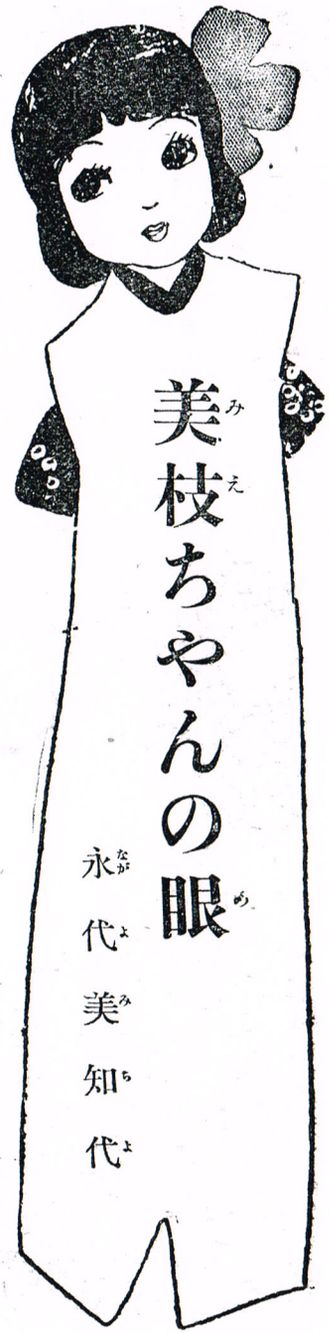

# 美枝ちやんの眼

永代美知代

『美枝ちやんの眼はお腹よりも大きいよ。』

美枝ちやんは家中の人達から、斯う云はれて居りました。

なるほど美枝ちやんの眼はパッチリとした可愛い眼です。でも、幾ら大きな眼が可愛いからつて、お腹よりも大きかつた日には堪りません、それこそ眼玉の化物です。

『アラ酷いわ、私そんなおばけぢやなくつてよ。』

美枝ちやんは怒りました。すると祖母様が仰有るには、

『でもね美枝ちやん、あなたは何でも彼でも眼につくものを皆なほしがつて、後から後から殘すぢやありませんか、だからお腹よりも大きなお眼だつて云ふのですよ。』

斯う云はれて見ると、美枝ちやんも文句の云へない譯がありました。

『ね、もつと頂戴よ。ね、もつとようつてば！』

十時のお菓子や、おやつのたんぴ、美枝ちやんのお鼻の鳴らない時はありません。

『そんなにどつさり一時に頂けるものですか、ね、またこんどになさい。』

母様が幾ら云つてお聞かせになつても、美枝ちやんは焦れて〳〵、思ふさまよくばらないではおきません。

でも、そんなに澤山なお菓子を如何して一時に食べ切れるものではありません。美枝ちやんはきまつて殘します。そして何時でもきまりの惡い云ひわけをします。

『私もう澤山……又あとで頂いて可いでせう、ね、ね。』

或る晩の事、その日は父様のお誕生日なので、美枝ちやんのお家では、いろんな御馳走がありました。御飯が濟むと母様はお茶をおいれになりました。わざ〳〵遠い日本橋のお菓子屋からお取寄せになつた立派なお菓子ですもの、そのお

いしさうなことと云つたらありません。
『母様、私にもね。』
美枝ちやんは堪らなくなつて云ひました。
『何ですね、お行儀の悪い！』
母様は一寸お眉をよせて、おたしなめになりましたが、小さな一人前の菓子器にとりわけて、鹿の子と、ようかんと、栗饅頭と、それからしぐれとそば饅頭と、都合五つまで下さいました。美枝ちやんはまた慾ばりました。
『母様、もつと頂戴よ、栗饅頭をも一つよう！』
母様のお眉がピリ、と動きました。でも折角めでたい父様の御誕生日だからでせう、母様は默つて美枝ちやんのねだるまゝ、栗饅頭を今一つお添へになりました。
『母様、鹿の子をもう一つよう。』
叱られるかしらと思つて、美枝ちやんはそつと母様の顔色をうかゞひました。すると御様子は不機嫌でしたけれど、別段おこゞとも仰有らないので、美枝ちやんの云ひなりになさるのでした。でも幾ら美枝ちやんだつて、そんなにどつさり食べられる譯がありません。
『私もう澤山よ、殘して可いこと、ね母様。』
ようかんも、鹿の子も、みんな食べ殘されてありました。
『ほうらね、美枝ちやんの眼はお腹よりも大きいよ。』
祖母様がお笑ひなさいました。美枝ちやんは聞かない顔で彼方へ逃げました。そして、玩具や繪本で遊んでゐましたが、何時の間にかお座敷へ寢轉んだまゝ、ついうと〳〵と寢入つてしまひました。
『お禮を仰有いよ。』
いそ〳〵とほがらかな聲が、つい傍で聞えます。
『オヤ、何だらう？』
美枝ちやんが四周を見廻しますと、大きな大きなお壽司屋さんの出前鉢よりも、もつと〳〵大きなお鉢へ、いろ〳〵なお菓子を山と盛つたのが、天から



降つたか、地から湧いたか、つい眼の前に置かれてありました。
『まあ！』美枝ちやんは驚ろきました。だつて御馳走ばかりぢやありません、其處には綺麗な小人が、突立つたまゝ、ぢつと美枝ちやんを見据ゑて居りました。
『私は方々廻つて食べ殘しをする兒達の癖を直して歩く小人だが、このお菓子をみんなおたべなさい。』
嚴い怖い聲でした。美枝ちやんはそつと大きなお鉢を横目で見ましたが、怖々云ひました。
『私、そんなに澤山とても食べられやしませんわ…』
『なるほどね、お前さんの眼はお腹よりも大きいさうだ。併しそれがいけない、ドラ、一寸私がお腹を大きくしてあげよう。』
美枝ちやんは氣味が惡いので、頻りと後ずさりをしましたが、駄目でした。
小人がちよいと魔法杖をふり擧げて美枝ちやんの脊に觸つたかと思ふと、何

だか變に體の調子が變つて來ました。

『さあ、殘さないでおあがり！』

小人が命令しますと、樽のやうに、樽のやうにお腹のふくらんだ美枝ちやんは、豚のやうに四つ這ひになつて、鉢の中のお菓子を口で以てたべました。でも餘り澤山なので、美枝ちやんはどうしたつて食べきれません。カステラも、ドウナツ、も、ようかんも、キャラメルも、お饅頭も、ウエーフアーも、キャンデーも、きんとんも、みんな美枝ちやんの涙で以て、鹽つぽくなつてしまつた程、美枝ちやんは泣いて泣いて泣きました。

一寸でも愚圖ついてゐると、『殘すときかないよ！』と小人が八釜しくせつきます。

『御免なさい、私苦しくつて堪りません。』

豚のやうな恰好をして、鉢の中の御馳走を鼻で嗅ぎながら、食べながら、美枝ちやんは一生懸命あやまりました。幾度あやまつても、幾ら泣いても、小人はあくまで頑固に頭を振りつゞけるばかりです。

『一切だつて殘すことはなりません、もうお前さんのお腹は大きな眼と同じになつてる筈だもの。』

『いゝえ、いゝえ、もう決して慾ばりませんから、御免なさい、元々通り小さな小兒のお腹にかへして下さい、後生です、お願ひです。』

美枝ちやんはオイ〳〵聲を立て泣き出しました。

『どうしたの美枝ちやん。』

誰かしら聞き馴れた聲だと思つて、美枝ちやんが眼を開くと、母樣が傍に居て仰有いました。

『さあ早く寢部屋へいらつしやい、そんな處でうたたねしてるといけません。』

『……まあよかつた、今のは夢よ……』

美枝ちやんはやつと安心しました。でも、それきりお行儀がよくなつて、翌日から十時のお菓子も、おやつも、食後のお菓子も慾ばらないで、チャンと母樣が下さるだけを頂いて、綺麗に食べました。

『この頃は美枝ちやんの眼が變つたね。』

家中不思議がつて云ひました。

（完）